

【2025 年度 終了レポート 奨学生の声】

奨学生 A さん

・ この一年間、多大なるご支援を賜りましたこと、心より厚く御礼申し上げます。奨学金ので、金銭的な不安に惑わされることなく、作曲と研究に没頭する充実した日々を過ごすことができました。

後期は「属性の異なる楽器によるアンサンブル」というテーマのもと、管・打・擦弦・撥弦楽器それぞれ一種ずつを用いた四重奏の制作に注力いたしました。なかでも初めて扱う楽器については、より深くその本質に触れるため自ら楽器を購入し、実際の奏法や響きの特性を研究いたしました。音の勢いが異なる楽器同士であっても、工夫次第で絶妙な調和を生み出せると確信できたことは、私にとって大きな収穫となりました。また、友人からの依頼で取り組んだ小編成の編曲活動も、実演を意識した貴重な学びの場となりました。

どのようなジャンルや現場であっても、その場にふさわしい最善の楽譜を書き上げるプロとしての責任を果たしていきたいと考えております。

同時に、自身の創作活動も決して絶やすことはありません。小編成作品での実演機会の創出や、管弦楽作品でのコンクール入賞、さらには自作とクラシックを編み直す演奏会の企画など、やりたいことは尽きません。

「自分の考えを忠実に表現し、それが人へと伝わる作品を創る」

この信念を胸に、作曲と編曲のどちらにも真摯に向き合っています。

皆様からいただいた温かいご支援を糧に、これからも音楽の道を一步ずつ、大切に歩んでまいります。

奨学生 B さん

・ 音楽ビジネスという専門領域において、講義での知識習得に加え、演奏会やミュージカルの企画・制作・運営といった実践の場で多くの経験を積むことができました。奨学金のおかげでアルバイトの時間を抑えられたことで、これまで制約のあった現場活動にも主体的に参加することができ、音楽を「伝える」ための多様な手法や、チームで一つの公演を創り上げる責任の重さを肌で感じることができました。

演奏者への支援に比べ、私のような企画・制作の立場を目指す者へのご支援は

決して多くありません。そのような中で、私の志を認め、挑戦を支えていただいたことに深い感謝の念を抱いております。経済的な支えがあったからこそ、目の前の課題に妥協することなく、理想の公演を追い求めることができました。

来年度は、自主公演の企画やインターンシップへの挑戦、さらには広報技術の向上など、より現場に即した専門性を高めていく決意です。実演家を支え、より多くの人に音楽の魅力を届ける力を養ってまいりたいと思います。

皆様からいただいたご支援を糧に、将来は日本の音楽文化の発展に寄与できる存在になれるよう、より一層の努力を続けてまいります。一年間、温かい応援を本当にありがとうございました。

奨学生 C さん

・奨学金のおかげで、経済的な不安に縛られることなく、ピアノの研鑽と修士論文の準備に集中することができました。特に地元での演奏会に出演できたことや、火災に遭った音楽バーのために自らチャリティコンサートを企画し、寄付を届けられたことは、音楽家として大きな自信と学びになりました。また、昨夏の採用試験で地元の音楽教諭としての道が決まったことも、皆様の支えがあったからこそと深く感謝しております。

いよいよ四月からは修士課程の最終学年です。修士演奏や論文の執筆に加え、コンクールへの挑戦など、乗り越えるべき壁はたくさんありますが、来春から自信を持って教壇に立てるよう、一日一日を大切に努力を続けてまいります。

これからも真摯に音楽に向き合ってまいります。

奨学生 D さん

・奨学金のおかげで、コンクールや各種セミナーへ積極的に挑戦することができました。

コンクールでの上位入賞を果たし、セミナーでも選抜コンサートへ推薦いただくなど、自身の学びを確かな成果へと繋げることができました。

幼い頃から抱いてきた「ヨーロッパで音楽を学ぶ」という夢がいよいよ現実のものとなります。現地では、国際的な視点で音楽への理解を深めるとともに、国際コンクールや音楽祭への参加を通じ、自らの音楽を積極的に発信してまいる所存です。また、私の生涯の目標である「チャイコフスキー国際コンクール」への挑戦に向け、この留学期間を一生の糧となるような実りある時間にしたいと考えております。

支援いただいた奨学金は、これまで大切に活用させていただくとともに、今後

の挑戦に備えて将来の活動資金として計画的に運用させていただきます。

皆様に支えられて踏み出すこの一歩を大切に、いつか大きな舞台での成果をご報告できるよう、全力で取り組んでまいります。

一年間、温かいご支援を本当にありがとうございました。

奨学生 E さん

・自身の課題と向き合い、新たな世界に足を踏み出した挑戦の一年でした。実技試験では悔しい思いもいたしましたが、それを機に自身の弱点を痛感できたことは大きな糧となりました。また、管楽器の伴奏を数多く引き受けたことで、アンサンブルにおいて「相手が吹きやすい演奏」を追求する大切さを学ぶことができました。

なかでも、オーケストラのピアノ奏者として参加したウィーン公演を無事に終えられたことは、私にとって何よりの達成感となりました。折からの情勢不安により渡航費がかさみ不安もありましたが、奨学金のおかげで、この貴重な機会を諦めることなく完遂することができました。この経験が認められ、次回の定期演奏会でもバーンスタインの「シンフォニック・ダンス」という大曲をお任せいただくことになり、今から期待に胸を膨らませております。

新年度は、クラシックとジャズの練習方法の違いに悩みながらも、アドリブの語彙やコードへの理解を深めるなど、自分に足りない部分を一つずつ克服していく決意です。また、副科のチェロの練習時間もしっかりと確保し、音楽的な幅をより広げてまいりたいと思います。

のびのびと学業に励む環境を支えてくださった皆様への感謝を忘れず、去年度の学びを次なる一歩へと繋げていけるよう、より一層精進してまいります。